

「子孫に美田を残す」

山形商工会議所建設部会長

平吹 和之



山形市内の繁華街には隠れた路地がいくつも
ある。時折、ふらりと歩いてみる。七日町の老舗バー
の横からかぎ型の小道に入る。かつては酔客が今
の季節なら心地よい風に誘われるように、冬には
積もった雪に足をとられながら通り抜けた、であ
ろう…。

城下街ならではの道ものこる。最上義光公が町
割りをしたと伝えられている職人町を結ぶ十日
町、本町、七日町の東裏通りもそのひとつで、南か
ら材木町、蛸燭町、銀町、塗師町、桶屋町、檜物町と
続き、突き当たった所で左に折れば旧三日町、
右に上れば柳町、笹谷街道へとつながる。

霞城公園の東大手門から東に上り、市立病院済
生館北側を通り七日町大通りへ。また、右に曲が
り大沼、アズ七日町の西を通る道もまた明治、大
正、昭和の初期には大変な賑わいを見せた。当時
の写真は伝える。こうした庶民の暮らし、歴史を
偲ばせる小路、背割り道路を現代そして将来に生
かす道はないものだろうか。

山形市は2008(平成20)年11月、国の認定を受け

た中心市街地活性化基本計画の戦略として3つ
の新名所を整備した。「山形まるごと館 紅の蔵」
「山形まなび館」「水の町屋七日町御殿堰」で、それ
ぞれが十日町、本町、七日町の拠点として大きな
役割を果たしている。

とはいえ、さらに山形の魅力を発信するにはど
うあればいいか。

キーワードのひとつは「繋(つな)ぐ」ではない
か、と私は思っている。小路、横丁の再生だ。整備
された所処に山形の土産品、伝統工芸品、食材を
提供する店、休憩できる場所を設ける。3つの拠
点を繋ぐことで、ゆっくりと歩いて山形の街を楽
しめる。小路や背割り道路を整備して賑わいを演
出している都市は金沢、高松があり、仕事柄訪れ
たが大いに参考になった。

もう一つのキーワードは「描く」。

市川昭男山形市長は2月、山形市への新サッカ
スタジアム誘致を表明した。降ってわいたような
唐突感は否めなかったが、野球場、総合運動公園
など県のビッグスポーツ施設が市外にあり、心の中
で「何でそうなったのか」と長年疑問を抱く山
形市民にとっては意外な事ではなかったのかも
知れない。商店街は一致結束し「JR山形駅西に
建設を」と署名活動を展開している。従前から山
形誘致を主張してきた者として汗をかかなけれ
ばならない。

が、事はスタジアムのみならず、「県立病院の跡
地利用はどうなる、市民会館も老朽化している」
との思いに至る。将来の山形市のランドデザイ
ン(全体像)をどう描くかに行き着く。それがあら
ためて問われている。

「子孫に美田を残さず」という言葉がある。しか
し、ここは将来の世代のために各界各層が英知を
結集し、協力し合って「子孫に美田を残す機会到
来」と認識すべきではないだろうか。

当社は今年4月で創立75年を迎えた。元々祖父
が五日町で屋根瓦を作っていた。山形市の建築課
に勤めていた父が設計業を始めた。山形では秦・
伊藤設計さんに次いでの開業で東北でも3番目。
私はと言えば35歳で山形に戻り家業を継いだ。こ
れまでに多くの地元の方々にお世話になった。そ
の山形が2040年に人口が20万9千人に減少する
という。道州制へ向けての動きも加速し始めている。
今まさに街づくりの正念場。商工会議所活動をベ
ースに、建築設計士の一人として恩返ししなければ
と思っている。

(株)平吹設計事務所代表取締役